説教20220410マタイ27：32-56「十字架の死」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

受難節も最後の一週間を迎え、イエス様の十字架の苦しみを思い起こす日々も深みを増し加えられています。そんな中、必ず読まれる聖書箇所と言うのが、このイエス様の十字架上での死を描いている今日の聖書箇所であります。言うまでもなく、イエス様は毎年、死なれるのではなくて、あの十字架のときにただ一回だけ死なれて、それから復活され今は天の父なる神の右に座っておられます。私たちは、イエス様の死と復活を思い起こすためにこうして毎年、この聖書箇所を読んで受難節を過ごすのです。

イエス様は、十字架の上から、私たちに対し、ひたすら十字架の道をそれることなく十字架の死と復活の道を歩んで行きなさい、と祈り願っておられます。その具体的な歩みの次第とは、自分の思いや計画によるのではなく、主イエスの御心に全く従順につき従っていくという事、如何なる苦難にも耐えて、十字架における死においてこそ、次なる新たな永遠に続く道の扉が開かれているという事を確信して歩んで行くという事です。

イエス様はご自分の体を切り裂かれ、その永遠なる道を切り開かれました、その道を私たちが信じて後に続いて歩んで行くことをイエス様はひたすら願っておられます。毎年毎年、そしていつもいつも。それは裏を返せば、私たちの信仰が、弱々しくて、少しの誘惑によって揺らいでしまって、永遠の命への道を反れてしまいがちであるという事の裏返しでしょう。そんな私たちの様子を見ておられイエス様は悲しまれ、必死になって私たちをイエス様の道へと引き戻すように努めておられるのです。今日は、イエス様の私たちに対するその切実なる思いの込められた御言葉を聞いて参りたいと思います。

最初の３２節に「兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。」と記されています。ここでは無理に担がせた、と受け身で記されていますが、本来、刑場に向かう罪人は一人一人、用意されている十字架を自ら担ぎ上げて自分の肩に載せて、十字架を担いで刑場まで歩いていくことになっていました。このしきたりを念頭に入れれば、イエス様が少し前に言われた、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」という御言葉の意味がはっきりしてくるでしょう。イエス様は、私たちが嫌々ではなく、喜んで自分の十字架を背負って、イエス様の後について行くことを願っておられます。

でも、十字架を喜んで背負う事など出来るのでしょうか。私たちには恐れと言う感情があるので、どうしても十字架を背負う時に、喜ぶどころか、怒りや憎しみ、そして恥や罪の意識にさいなまれるのではないでしょうか。それがこの地上をのたうち回って歩いている肉なる私たちの偽らざる実情であります。しかし、それを解決して下さり私たちを平和へと導いて下さるのも、またイエス様の御言葉しかないのです。

少しダビデの話を致します。ダビデは主なる神から召命を受けて、イスラエルの王となりましたが、彼も又、この地上に於いて、のたうち回り、これ以上にないほどの苦しみ悲しみを経験した人物でした。しかし彼は自分の十字架を喜んで背負って、救われた人物の一人でありました。ダビデが十字架に付けられた様子は詩編22篇に記されています。この詩編22篇と、今日のマタイの箇所とは密接な関係がありまして、マタイは、詩編２２編を念頭に置いて十字架に付けられたイエス様のことを記したのです。例えば、マタイ福音書に記された、「彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、」ですとか、「そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、」ですとか、「神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。」ですとか、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と言うのはみんな詩編22篇からの引用であります。

十字架に付けられたダビデ、と言いましてもダビデの場合は、心の中で起った出来事ですが、彼も「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と心の中で叫び続けました。ちなみにこの言葉は、あまり、と言いますか全く励ましの言葉にはなりません。私も今回、この言葉を何回も唱えていましたが、唱えるごとに益々落ち込んでいきました。それはそうだと思います。将にこの言葉は信仰告白ではなく不信仰告白だからです。だから、この言葉で終わってしまっては意味がないのです。イエス様の十字架もこの言葉で始まって、それから体の死が訪れ、それから体の復活が訪れるのであります。詩編２２篇もこの不信仰告白で始まって、ダビデは遂に主なる神の御言葉を聞いて、主なる神に感謝と賛美を捧げる者へと変えられていくのです。

落ち込んで行ったダビデは歌います。「わたしは虫けら、とても人とはいえない。人間の屑、民の恥。わたしを見る人は皆、わたしをい　唇を突き出し、頭を振る。」ダビデは王様でありながら、この様に繊細で傷つきやすく、自分の弱さを自覚できる人物でした。彼はこういった性格を彼の人生において否応なく培われました。ダビデは前の王であるサウルから重んじられ戦士の長に任命されます。人間的に言えばサウルによって地位を引き上げられたという事です。しかし次第にサウルから、ねたまれるようになってついにはサウルに執拗に追い掛け回されて命を狙われるようになってしまいました。それから、ダビデは国家の祝祭の時に、家臣たちと裸になって喜び躍ったことを妻のミカルから、嘲笑され、「空っぽの男」と言い放たれました。これはダビデと妻ミカルの間で心が通い合っていなかったことを示しています。それからダビデは、愛する実の子アブサロムから命を狙われることにもなります。それは王位をめぐる争いによってでしたが、結局アブサロムはダビデによって殺されてしまいます。

ダビデの人生はこの様に、信頼していた身近な人々、つまり上司や妻や息子たちによって裏切られつつも、その人たちを愛することを止めなかったという、深い心の葛藤を伴うものでした。

そう言うダビデの口からは自ずと次のような信仰告白が語られます。詩編22編 20節

「主よ、あなただけは　わたしを遠く離れないでください。

わたしの力の神よ　今すぐにわたしを助けてください。」

主よ、あなただけは、というところにダビデの心の底からのまことの叫びが聞かれますが、ここには、確かに、自分が親しくしていた上司や、妻や、息子たちに私は裏切られてしまったが、主よあなただけは、私を離れないでくださいという、恨みとも、恥とも、後悔ともつかないような、いかんともしがたい情念が露わにされています。

ダビデは続けて告白します。「わたしの魂を剣から救い出し　わたしの身を犬どもから救い出してください。獅子の口、雄牛の角からわたしを救い　わたしに答えてください。」ダビデのいかんともしがたい情念はこの様にダビデに語らせます。一歩間違うと、ダビデは親しい人たちを恨んでしまい、自分も暴力でもってやり返す者へとなりかねません。しかし、ダビデは信仰深くて、とにかく主なる神に救いを求めました。そして、そのことがダビデを救ったのです。ダビデは主なる神に「わたしに答えてください。」と告白していますが、この訳は新しい聖書訳では「あなたは私に答えてくださった。」という様に完了形に訳し直されていて、ダビデは何らかの主なる神の御言葉を聞いて救われた、という事実がここに記されているのです。ダビデは主なる神の救いの御言葉を聞き、救われて、それまでの落ち込んで行った状況から、向きを変えて、希望へと歩み出すことになったのでした。ダビデは「苦しむ人は食べて満ち足り　主を尋ね求める人は主を賛美する。あなたがたの心がいつまでも健やかであるように。」と歌えるように変えられ、全ての苦しむ人、そこには以前自分を苦しめた人も含まれるでしょうか、そういった人々の為に、執り成し祈る者へと変えられたのであります。

以上が、ダビデの心の中の十字架によって成し遂げられた救いの出来事であります。私たちはダビデと言う私たちと同じ一個の人物のこのような回心に共感し、自分の日常に当てはめて多くを学ぶことが出来るでしょう。

そしてイエス様が肉をとられたという受肉の出来事以降の、今と言う新約の時代を歩まされている私たちには、更にイエス様によって恵みが増し加えて与えられています。私たちが目指している十字架は、ダビデが心の中で思い描いた十字架と較べて、実にはっきりとしています。そしてイエス様を信じる私たちが一つとなって信じていくことが出来るはっきりとした道であります。イエス様は一度この地上に降って下さり、私たちと同じ肉体をまとわれて、信じる者たちの友となって、いっしょにこの地上を歩んでくださいました。今ここに集う兄弟姉妹も、そのようにイエス様に受け入れられイエス様の友となり、いっしょにこの地上の一歩一歩を歩んでいるのです。

只、その永遠の命の道が、イエス様と共にはっきりと示されている、という事は、その道を踏み外してしまう事へのおそれをも又はっきりさせてしまいます。先週、イエス様は私たちを信じるものとするために、ラザロを復活させその姿をみんなに示したのですが、その出来事がかえって、信じるものと信じない者とをはっきり分けてしまいました。

又、イエス様が十字架に付けられるに至って、最後までイエス様に寄り添ったのは、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母といった大勢の婦人たちだけでした。

では新約の時代に生きる私たちに与えられている、更なるイエス様の恵みとは何なのでしょうか。。。それは新約聖書に記されているイエス様の数々の御言葉であります。御言葉と言うのは、私たちがイエス様と親しく応答することによって、次々に引き出されてイエス様が私たちに答えて下さる言葉です。先ほども触れましたが、イエス様ご自身「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と十字架上で叫ばれましたが、御言葉には続きがあります。次には「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。」という私たちの体の復活を示す御言葉が続いています。

私達は、イエス様、あなただけは私を離れないで、いつも共に居て下さいと、祈り願うことによって、イエス様から御言葉を新たに与えられ、絶望では終わらない新たな復活の命につながる希望を与えられます。事実、イエス様は遠く離れたところにいるのではなくて、私のうちに宿っておられます。私たちは自分自身を虫けら、とても人とはいえない。人間の屑、民の恥の様に思ってしまい、落ち込んでしまうことがよくあります。しかし、イエス様はご自分の体を張って、私たちのその様な恥や罪を引き受けて下さって、十字架上でそれらを全て打ち砕いて、死をも打ち砕いて、私たちに永遠の命への扉を開いて下さったのでした。私たちは、そのことを堅く信じて、自分の十字架を日々喜んで背負いながら、イエス様に最後まで従う従順謙遜の道を歩んでまいりましょう。

祈ります

父なる神

御子は十字架への道を歩まれています。私たちはその苦しみをおもいつつ、自分たちの罪が御子の十字架の死によって赦され、新たな喜びに生かされていきます。この十字架の恵みに感謝し、あなたを賛美します。これからイースターに向けて受難節の最後の一週間が始まりました。どうか、御子があなたの御心に最後まで従順に従った様に、私たちも自分を捨てて、自分の十字架を喜んで背負って、十字架への道を反れることなく歩ませて下さい。

主よ、私たちの驕り高ぶりによって、今、地上で多くの争いごとや戦争が行われていることを省み、私たちを憐み、赦してください。どうか、あなたが十字架上で示された、全ての人たちへの愛によって私たちを救ってください。

御子は御言葉となって肉体をとって私たちの内に宿ってくださいました。どうか私たちがこの一週間、御子と親しく会話しながら、永遠の命の扉の前に導かれ、全ての苦しみ悲しむ方々の為に、とりなし祈ることが出来るようにしてください。

父と聖霊と共に一体